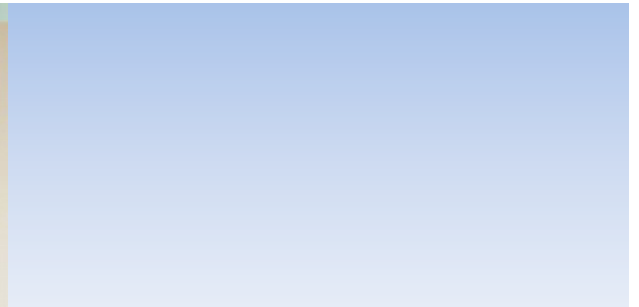


夢を応援基金 ～東日本大震災奨学金制度～

2015年度 活動報告



制度概要

名称	「夢を応援基金」(東日本大震災奨学金制度)
奨学金	月額30,000円(給付、返還不要)
奨学生	約1,097名(2011年9月奨学金給付開始時の人数)
目的	本奨学金は、2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「本震災」という。)によって経済状況が急変、または悪化し、就学継続が困難な状況にある、日本国内の高等学校及び高等専門学校(1~3年)、並びに高等専修学校に在籍する生徒に対し、大学など上級学校卒業までの間、奨学金を給付することにより、経済的不安を緩和し、学習効果を高めることを目的として寄与するものです。
運営体制	創設者：株式会社ローソン 運営主体：公益社団法人Civic Force 基金こと務局(奨学生等との窓口業務)：特定非営利活動法人チャリティ・プラットフォーム *このこと業は、Civic Forceの「中長期復興支援こと業」の一環として運営されています。また、奨学金を含む運営のための資金は、ローソンによる店頭募金やマルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」で受け付けられた募金、Pontaポイントでの募金のほか、Civic Forceオンライン寄付などから受け付けられた寄付により賄われています。
支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 月額3万円の奨学金給付(返還不要) ■ 教育プログラム(ボランティア活動、奨学生交流会など)の実施によるサポート ■ その他被災地の生徒や学校からの意見も取り入れ、現地のニーズに合わせた様々なサポートプログラムを実施予定
対象者 *募集当時	高校進学を控えた中学3年生(予約奨学生)、高等学校、高等専門学校(1~3年)等に在籍していた生徒
応募資格 *募集当時	<p>下記(■)の条件をすべて満たし、かつ、AまたはBのいずれかに該当すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本震災時に家計を支える方が岩手県・宮城県・福島県に居住しており、同地域の学校に通学していた生徒 ■ 学校の推薦を受けることができる品行方正な生徒 ■ 夢をかなえるために、意欲と根性があり、東北の復興への貢献を希望している生徒 <p>=====</p> <p>A.本震災により家計を支える方が死亡・行方不明・負傷病氣・失業等の被害を受け、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p> <p>B.本震災により住居していた住宅が半壊・半焼または床上浸水以上程度の被害を受け、または計画的避難区域になっているなど、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p>
支給期間	2011年9月より高校・高等専修学校卒業または専門学校・大学などの上級学校(大学院除く)卒業までの最大7年間 ※2011年度は、2011年9月から2012年3月までの7カ月間。以降、毎年進学時に更新手続き有り
注意こと項	受給者は、奨学金の返還義務を負いません。また、奨学金の主たる提供者(株式会社ローソン等)への入社等その他の付帯義務を負うものではありません。 ※2016年3月現在、奨学生は募集していません。

「夢を応援基金」運営協力企業



株式会社教育新聞社
運営のための様々なご協力をいただいております



認定特定非営利団体ブリッジフォースマイル
運営のための様々なご協力をいただいております



株式会社七十七銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております



株式会社東邦銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております



株式会社岩手銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております

第5期活動概要

2011年3月11日の東日本大震災発生から半年後の2011年10月、株式会社ローソン（以下、ローソン）からのお申し出により立ち上がった「夢を応援基金」より、第1回目の奨学金が奨学生1,097名に支給されました。「夢を応援基金」では、2,400通の応募の中から選ばれた1,097名の被災学生に対し、高校入学から大学を卒業するまでの最長7年間、奨学金を支給します。

第1回目の奨学金支給開始から約4年半――2015年4月、4回目となる更新手続きでは、184名の子どもたちが高校や上級学校（大学、短期大学、専門学校等）を無事卒業し、社会に羽ばたいていきました。2015年度は上級学校に進学した151名を含め、483名の奨学生に奨学金を支給しました。1年間の奨学金支給を経て、2016年3月、「夢を応援基金」は皆様のご支援のお陰で、無事、第5期を終了することができました。

基金の創設者であるローソン、そしてローソングループの店頭募金にてご協力をくださった多くの皆様、オンライン寄付によりご寄付をいただいた個人の皆様に、活動のご報告と併せまして、心より御礼を申し上げます。

夢を応援基金の主な活動		
2016年	4月	2016年度更新手続きを実施
2015年	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソングループ各店で店頭募金を実施（一ヵ月間） ■夢を応援フォトコンテスト2016を実施
	2月	仙台で開催された復興応援イベント「LAW SON Presents ドリームトークショー&クロストークディスカッション+ライブ」に奨学生が参加
	8-9月	宮城県で夏の体験プログラム3件を実施
	4月	2015年度更新手続きを実施
	2月	ローソン店頭マルチメディア情報端末「oppi(ロッピー)」を通じた募金の受付を開始
2014年	8月	宮城県で奨学生交流会と夏の体験プログラムを実施
	7月	岩手県で奨学生交流会を実施
	4月	2014年度更新手続きを実施
2013年	11月	仙台で奨学生交流会を実施
	8月	東京で奨学生交流会を、宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2013年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■「夢を応援基金」の運営主体が公益社団法人Civic Force（シビックフォース）に移行 ■全国のローソンで、募金告知のため『1,097のありがとう』（小冊子）を配布 ■全国のローソングループ各店で店頭募金実施（～5月末）
	1月	奨学生のうち、高校2年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布
2012年	5月	予約奨学生（申込時に中学3年生で、新高校1年生）への奨学金支給開始
	4月	2012年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～5月末） ■奨学生のうち、高校2年生及び高校3年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布 ■基金奨学生募集時に、申請書を提出した学生が在籍する高等学校及び高等専門学校に対し、自立支援ハンドブックを寄贈
	2月	ローソン主催による、被災3県の高校生を応援する夢を応援基金「スペシャル講演&ライブ2012」を仙台市で開催。約700名が参加
2011年	12月	ローソングループ社内募金の受付開始（給与天引き制度）
	11月	旺文社様からのご寄付と寄贈により、奨学生募集時に申請書を提出した学生が在籍する高等学校、高等専門学校、中学校全358校に対し、『これでもいまは、真っ白な帆を上げよう』を2冊ずつ寄贈（合計716冊）
	10月	<ul style="list-style-type: none"> ■第1回目の奨学金を支給 ■奨学生とならなかつ生徒には、支援金3万円とローソンプリペイドカード6千円分を進呈
	9月	1,097名の奨学生が決定（応募総数2,400名）
	7月	被災地（岩手県、宮城県、福島県）の高等学校、高等専門学校、中学校等に奨学生の募集を告知し、奨学生を募集
	5月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～8月） ■ローソン各店舗にて、寄付つき商品の販売を開始（その後随時実施）
	4月	「夢を応援基金」創設
	3月	東日本大震災発生

卒業生からのメッセージ-1

2016年春、多くの奨学生が夢への第一歩を踏み出しました。
寄付をいただいた皆様へ御礼のメッセージが届いています。

「消防士として」一福島県出身

奨学金があったおかげで親への負担をあまり気にせず勉学に費やすことができました。おかげで希望の職に就くこともでき、本当に感謝しています。今後、消防士として一生懸命努めていきたいと思えます。ありがとうございました。



「未来の復興を担う子どもたちの夢を後押しできるように」一宮城県出身

4月から宮城県で教員として働くことになりました。震災で苦しい思いをしましたが、今の自分があるのはこの基金のおかげです。これからは震災のことを忘れずに、未来の復興を担う子どもたちの夢を後押しできるように頑張っていきます。本当にありがとうございました。

「地元の復興に携わります」一岩手県出身

この基金のおかげで、大学へ進学し、勉学に励むことができました。卒業後は公務員として、地元の復興に携わります。そして、復興だけではなく、自らの夢も追いつけていこうと思っています。ありがとうございました。

「多くの人を支えられる人材になりたい」一宮城県出身

この奨学金のおかげで看護学校へ進学することができました。本当に感謝しています。この奨学金が無ければ進学するのは不可能であり、家族にも負担をかけることとなりました。皆様からの支援を胸に、自分も社会に出て多くの人を支えられる人材になりたいと思えました。

「震災を経験した後輩たちにも顔をあわせられるように」一福島県出身

4年間ありがとうございました。夢を応援基金のおかげで学生生活はお金に関しては困ることがなく非常に助かりました。ここからは一社会人として励んでいくと共に、震災を経験した後輩たちにも顔を合わせられるように立派になりたいと思えます。確かに震災は辛いものでしたが、それを経験したことはいま自分の精神力を作るものとなりました。このような制度で学生生活をバックアップしていただいた夢を応援基金には感謝しかありません。本当にありがとうございました。



「無事に新たなステージに立つことができました」一岩手県出身

3年間支えていただきありがとうございます。無事に卒業することができ、新たなステージに立つことができました。これから、大変なこともあるかと思いますが、たくさんの方々に支えていただいたことを忘れず頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。

「伝統工芸品である漆器を学ぶために」一福島県出身

4年間、奨学金をいただき本当にありがとうございました。福島県の会津の伝統工芸品である漆器を学ぶため、伝統工芸品の会社に就職し、同時に漆器訓練校に通うことが決まりました。4年間の奨学金のおかげで、当初の目標である、福島復興を少しでも応援する業種に就くことができました。ありがとうございました。



「震災によって傷ついた生徒の力になれるように」一宮城県出身

4年間本当にお世話になりました。夢を応援基金の奨学金のおかげで充実した大学生活を送ることができました。4月から心のケア支援員として働くことになりました。同じように震災によって傷ついた生徒の力になれるように一生懸命頑張りたいです。また、養護教諭になることが一番の夢なので、正採用を目指し、勉強のほうも頑張りたいと思えます。

卒業生からのメッセージ-2

「もっと生きたい」と夢の中で言った、亡くなった友人への思いを胸に 一宮城県出身

4月から社会人になります。皆様のおかげで4年間楽しい大学生活を送ることができました。ある時、亡くなった友人が夢に出てきて、彼女が「もっと生きたい。」と夢で言いました。私は彼女の分まで生き、彼女の為にも一生懸命何ことにも全力で取り組むことが亡くなった方への追悼だと思っています。17歳という短い人生に幕を閉じた友人の為にも私たちは生きなくてはならないのです。

そして、支援してくださった方々にどうやって恩を返そうか考えてみたとき、社会の役に立つ人間になりたいと思いました。その結果春からエコ商材の提案営業を行います。震災時、ライフラインも使えず不便な生活を送り、何気ない生活が一番の幸せということを教えてくださいました。日本は便利なものに頼りすぎて無駄が多いと感じます。私は、自分たちの明るい未来に貢献できるように努力していきたいと思います。そして、予測されている首都直下型地震、南海トラフ地震の時に何かサポートのできるように地震や津波の怖さも伝えていけたらいいと思います。約5年間本当にありがとうございました。



立派な幼稚園教諭に一福島県出身

私は幼い頃から夢だった幼稚園教諭になることができました。夢を応援基金のおかげで短期大学まで進学し、夢を諦めずに進むことができました。とても嬉しく、心から感謝しています。5年間支えていただきありがとうございました。震災から5年が経ちましたが、今でも多くの方々に支えてもらっている感謝の気持ちを忘れずに、春から立派な幼稚園教諭として、日々精進して行きたいと思います。本当にありがとうございました。



夢を諦めず - 岩手県出身

東日本大震災で被災し、大学進学を諦めかけていたとき、先生からの紹介で貴基金を知りました。学生にとって返済不要の奨学金はありがたいと感じています。私は他の返済が必要な奨学金も借りているので、将来返済なくていい奨学金というのは、経済的にも心理的にも負担が軽減されるものでした。学生時代は、奨学金をいただきながらアルバイトをして生計を立てつつ、就職活動のための資金を貯めました。おかげさまで、岩手県から東京都までの就職活動にかかる費用を、ほとんど親に頼らず自力で捻出することができました。私にとって東京で働くということは、夢でありながら諦めかけていたことでもありました。もし高校を卒業してそのまま就職していたら、経済的なこと情から岩手県の地元で働いていたと思います。就職先はもともと私が志望していた業界とは異なるのですが、興味があった業界ではあり、一から新しいことを学びつつ働くこととなります。不安はありますが、自分がやっと社会に出て働けること、今までお世話になった人たちに自分が働いたお金で食ことを奢ったり、プレゼントをあげることができる考えると、ワクワクもしています。奨学金があったことで、夢を諦めずに叶えることができました。私が支援いただいた方々に直接できることはないかもしれませんが、社会人として働くことで、どこかでは恩返しができるように頑張りたいと思います。4年間、ご支援いただき、ありがとうございました。

沢山の縁を感じながら - 宮城県出身

今日の日まで沢山の支援をしてくださった寄付者の皆様本当に感謝したいと思います。ありがとうございます。文章でしか自分のことを伝えることができない中で、夢を全力で追わせていただきました。まだまだ諦めてもいません。むしろまたこれからだと思っています。この4年間で沢山の経験や沢山の方に出逢うことができました。震災で被災して居なかったらここまで自分を見つけて居なかったと僕は思っています。そう思うと、僕は沢山の縁を感じながらやって来られた気がします。恩返しできるようこれからも精進します。本当にありがとうございました。

※学年は2014年8月時点のものです。

サポートプログラム実施報告

2015年8月～9月、東北の「今」と「未来」を考える、3つの体験型研修を実施

「夢を応援プロジェクト」のサポートプログラムとして、2015年8月から9月にかけて、東北で活動する地元NPOと協力して、3つの体験型研修を実施しました。8月19～21日、宮城県気仙沼市において「森は海の恋人プログラム」、9月1日～4日には宮城県気仙沼市において「ネットワークオレンジプログラム」、9月18日～20日には宮城県登米市において「くりこま高原自然学校プログラム」を実施しました。今年で3年目を迎えるこのプログラムには、延べ4人の大学生が参加しました。それぞれ特色のある活動をされている団体での体験を通じて東北の「今」を感じ、各団体の活動の中から東北の「未来」を垣間見る時間となったようです。

「森は海の恋人プログラム」

「自然の“環”から、人の“和”を育てよう！」をキャッチフレーズに、環境教育・森づくり・自然環境保全の分野で活動するNPO法人「森は海の恋人」。プログラムには宮城県出身の大学生2名が参加しました。このプログラムではまず、森は海の恋人副理こと長の畠山信（まこと）さんのご指導のもと、ナタと小さな木の板、マッチを渡され、誰が最初に火を起こせるかという火起こし体験をしました。ただやみくもに木材に火をつけようとしても全く火がつかず、どうすれば火が付きやすいのか、ついた火がすぐに消えないようにするためにはどうしたらいいのかなど、火の特性を考えて行わなければなりません。火を起こすという単純な作業の中で、これだけのことを考えなければならないことを知ることができました。他にも、木造船を櫓で漕いで海に出て、牡蠣の養殖筏で牡蠣の生態や牡蠣のエサになるプランクトンについて、そしてそのプランクトンをエサとする海の生き物の食物連鎖についての講義を受けました。その後は、浜辺で生き物を採取し、その生態を学び、夜にはハモやアナゴ釣りに出かけました。自分で釣った魚を自分で捌くことや、ホタテ剥きなど、普段の学生生活の中ではなかなかできないような貴重な経験をしました。



そして、森は海の恋人の理こと長であり、2012年フォレストヒーローに選出された畠山重篤（しげあつ）さん直々にご指導いただきながら、植樹体験をしました。なぜ、漁師が山に木を植える活動をしているのか、どうして「森は海の恋人」なのか、海と森とは一見関係ないようだが、海に流れてくる栄養分がどこから来るのかを辿っていくと、実は全てが山からやってきているという発見があり、森と海とは切っても切れない関係にあるなど、とても面白い講義をしていただきました。参加した奨学生は、どんなことでも一つの枠にとらわれず、もっと広い視野で物ごとを見ることの重要性を学び、実り多き時間を過ごしました。



「地域で頑張っている大人はカッコいい」三浦 なつきさん（立命館大学3年、宮城県出身）

土木工学や自然科学の研究を政策にいかしつつ、自然を守り、自分たちの暮らしを守るためには、学際的な視点が重要であるとお話を聞き、気仙沼市やこれからの日本における自然との共生の方法を考えるためのヒントが得られました。また、地域で頑張っている大人はとてもカッコいいと思いました。



「体験することの大切さを再認識」 穴戸 北斗さん（岩手大学3年、宮城県出身）

今回のプログラムに参加して海の水は山から川へ、里へそして海に行くという、漁業、農業、林業そして私たちの生活と多岐にわたっていることを学びました。机の上だけでなく、実際に出向いて体験することの大切さを再認識しました。この経験を生かし、これからも知らない世界に足を踏み入れていきたいです。

※学年は2015年8月時点のものです。

サポートプログラム実施報告

「ネットワークオレンジプログラム」

2003年から宮城県気仙沼市で活動を開始したネットワークオレンジ（小野寺美厚（みこ）代表）は「障がいのある人も無い人も、みんながまちづくりの主役だ！」をスローガンに、福祉、まちづくり、社会起業家育成と多岐にわたって事業を展開。このうち、福祉事業では障がい児の療育支援として、作業訓練や生活訓練、地域における自立支援など幅広く活動されています。



活動初日は、ネットワークオレンジの活動について、小野寺美厚代表からブリーフィングを受けたあと、放課後デイサービスの利用者の子もたちと一緒に遊んだり、作業を手伝ったりと、見守り・援助作業を担当。2日目と3日目には高校を卒業した方を対象とした「オレンジエッグ」で、利用者の方々が毎日行っている計算問題や漢字学習の先生役となり、一緒に問題を解いたり採点作業を担当。また、昼食は利用者の皆さんが自分たちで作ることになっており、調理作業の援助や見守りをしました。3日間の活動を通して、利用者一人ひとりに合わせたケアの重要性、一人ひとりの「できること」を伸ばすために必要以上に手を差し伸べてはいけないことなどを学んだ、意義のある3日間になりました。



「温かい心を持って」柳葉れなさん（植草学園大学1年、福島県出身）

ボランティア活動をあまりしたことがなかったので緊張しましたが、温かい雰囲気の方々ばかりで安心することができました。特別支援学校教諭の免許を取ることを目標に大学で学んでいますが、小学生以上の利用者の方々と接する機会はこれまでなかったので、貴重な経験となりました。温かい心を持って人と接することができる人間でありたいと改めて強く感じました。これからもたくさんの経験を積んでいきたいです。

「手のひらに太陽の家プログラム」

東日本大震災で被災した子どもたちの支援と被災地の活性化のため2012年にオープンした「手のひらに太陽の家」。宮城県北東部にある登米市に位置し、放射線量の高い地域での生活を強いられている福島県の子もたちとその家族を受け入れ、支援しています。



2泊3日の「手のひらキャンプ」に参加した福島県の親子と寝食をともにし、子どもたちと遊んだり、一緒にご飯をつくったりと家族の滞在をサポートしました。プログラムでは、地元のお祭りや「ピン笛つながりコンサート&ワークショップ」、ブドウ狩り、バーベキュー大会など、市内外からの協力者とともにイベントの開催を盛り上げました。また、手のひらに太陽の家を運営するくりこま高原自然学校の佐々木豊志代表から設立の経緯や活動内容について学んだほか、被災地の抱える悩みや現在の状況、また将来の展望などの様々な意見をうかがうなど濃密な時間を過ごしました。

「子どもの視点の大切さ」宍戸北斗さん（岩手大学3年、宮城県出身）

3日間子どもたちと過ごす中で、子どもの視点から見えるものが数多くあると感じました。大人には非常にささいなことであっても子どもにとっては友達との関わり方を学んでいるなど軽視することができないと感じました。今回であった多くの人とのつながりを大切にしていきたいです。

※学年は2015年8月時点のものです。

奨学生の2015年度の振り返り-1

奨学生に、2015年度を振り返って、「私の宝物」「来年度チャレンジしたいこと」などをテーマに課題作文を書いてもらいました。ここに、その一部を紹介します。

【私の宝物】

「支えてくれた家族に恩返しができるように」—大学4年/岩手県出身・在住

私の宝物は家族です。ありきたりな回答だと思われるかもしれませんが、それでも私は『家族』と答えたい。全部、ぜんぶ流されてしまったけれど思い出はいつまでも色あせず、心に残されて、忘れないのだろうと改めて感じました。そして、家族がいてくれるからこそ、思い出を語り合う瞬間やその大切さに気づいていけるのだろうと思います。今年は、大学生活最後の年です。これまで支えてくれた家族に恩返しができるように、これから始まる最後の1年を一生懸命頑張っていきたいです。

「震災に遭ったことは悪い意味でも良い意味でも私の宝物」—専修学校3年/福島県出身・在住

震災に遭わなかったら今この言語聴覚士というものを目指していなかったと思います。震災に遭ったからこそ専門学校に通い、友達ができ、人の役に立ちたいと心から思えるようになりました。震災前までは、将来の夢がぼんやりとしていて何にしたいとははっきり決まっていなかった。震災に遭ったことは悪い意味でも良い意味でも私の宝物と言えるでしょう。

【来年度チャレンジしたいこと】

「家族のいる陸前高田で看護師として働きたい」—専修学校3年/岩手県出身・在住

看護学校に入学して3年目を迎えました。生活面は、1人暮らし3年目に入りますが、学校も近く友達もいて楽しく生活しています。看護学校は、学ぶことも多く大変ではありますが、充実した学生生活を送っています。3年生は学生時代最後の学年で実習、国家試験、就職活動と大変な年になります。実習は、今まで学んだことを頭に入れて、たくさんの方を先輩看護師から学び、私が看護師になった時に少しでも実習で学んだことをいかせるよう頑張りたいです。国家試験は、必ず合格するように、苦手分野を学習して、試験に備えたいと思います。就職活動は、家族のいる陸前高田市にもどって、岩手県立病院に就職して自宅から通えるように、頑張りたいと思います。



【この1年間で私が成長した点】

「家業から学んだ責任感と信頼関係の大切さ」—大学3年/宮城県出身・滋賀県在住

私はこの春休みの2ヶ月間、地元の宮城県南三陸町に帰省し、実家の仕事である水産加工の手伝いをしました。朝早く起き、日中は厳しい肉体労働という生活をほぼ初めて体験した私は、毎日が疲労困憊であり、働いてお金を稼ぐという大変さを実感しました。1ヶ月ほど経つと私も仕事に慣れ、色々と仕事を任せられるようになり、それをきっちりとこなしていかなければいけないという責任感も身につけることができました。またこの2ヶ月間で、ただ作業をこなしていけばよいというわけではなく、ほかの従業員との信頼関係も大切であり、しっかりとした絆ができていけばお互いのミスをカバーしたり、励まし合うことができることを学びました。これらのことは将来の就職はもちろん大学生活でも非常に大切なことであり、この貴重な経験を活かして更なるレベルアップをしていきたいです。

【この1年間で最も印象に残っているできごと】

「箱根駅伝出場！」—大学3年/岩手県出身・埼玉県在住

この一年でもっとも印象に残っている出来事は第92回東京箱根間往復大学駅伝競走（通称 箱根駅伝）に東京国際大学の5区として出場することができたことです。箱根駅伝ではスタート直後は思ったようなリズムで走ることができませんでした。中間点を過ぎてからはリズムに乗ることができ、最終的には当初目標に掲げていた区間10番以内、82分前後という目標を達成し区間7番、82分01秒という結果を残すことができました。今年度は昨年度とは異なり、年間を通じて納得の行く結果を残すことができませんでした。しかし、この大学に来た最大の理由である箱根駅伝を走るという目標を達成することができました。テレビで見ていたコースを自分が走ったということは今でも信じられないし、体験したことがないくらいの大観衆の中を走り抜けたということは一生の財産になると思います。今年も予選会からのスタートになりますが、絶対に通過し今年度大学初のシード権を取りたいと思います。

奨学生の2015年度の振り返り-2

【この1年間で私が学んだこと】

「苦しいことがあっても必ず先は見えてくる」—大学1年/宮城県出身・東京都在住

この1年間は浪人生という立場だったことから、特に勉強に集中しました。この期間の中で学んだことは、苦労が続く中でも必ず終わりが見えてくるということです。

現役の時に志望校に落ちてしまったからは非常に苦しい毎日が続きました。現役で受かった同級生の近況を耳にするたび辛い気持ちになることもありました。自分の成績の伸びが目に見える自信につながり、もっとやろう！という意欲が出てきました。その結果、センター試験本番では自己ベストの点数をマークすることができ、入学した大学にもセンター試験の点数のみで合格を決めるに至りました。今までの人生の中で一番大変な一年となりましたが、現在晴れて大学生となることができ心底ほっとしています。

故郷の宮城を離れ、東京での一人暮らしを始めるには不安も多く慣れずにはいましたが、浪人時代頑張ったことを思い出せば何ことも乗り切れる気がします。苦しいことがあっても必ず先は見えてきます。浪人時代に学んだこのことを生涯胸にとどめ、生きていくことがこれからの目標です。



【この1年間でもっとも力を入れたこと】

「繋がりを大切に」—大学2年/宮城県出身・栃木県在住

私がこの1年間で最も力を入れたことは、震災関係の活動です。私は関東への大学進学を機に、宮城県、そして南三陸町から離れることになりました。被災地を離れても震災関係の活動をしたい、被災地の情報を絶ちたくない、そのような思いで、大学1年生では様々な活動をしてきました。自分にとって1番大きな活動だったのは、南三陸ツアーの企画、運営です。高校時代から様々な活動に参加していた地元の友人5人で企画した活動です。活動を通して感じたことは、人との繋がりの大切さです。1つの活動で知り合った人の紹介で、またの活動に繋がり、そこでまた新たなことを考え、学ぶことができました。今後も今までの繋がりを大切にして、様々な活動をしていきたいと思っています。

「共同生活の中でのルール作り」—大学3年/宮城県出身・京都府在住

快適な住環境実現のため、寮の改革に尽力しました。私は大学寮に住んでいます。在寮生は18人です。ある日寮生間で生活上のトラブルが発生しました。その日を境に寮生間の関係が悪化しました。寮は住みにくく出て行きたいと思う寮生が現れました。私は悩んでいる寮生を見て、何かできることは無いかと考えました。そこで、まず寮生間の関係悪化の原因と解決策を模索し、寮のルールを作ることを考えました。しかし、寮設立から寮にはルールが無いのが当たり前でした。なので、反対的な寮生が多かったです。そこで、私は反対の理由をヒアリングして面倒くさがる彼らに、ルール策定までの経緯、将来性、他寮との比較、これらを個々に説明しました。すると、ルール策定に共感を得られ、寮生から信頼を得られるようになり、次第に全寮生からコンセンサスを得て寮のルールを施行でき、寮生間のトラブルも無くなりました。快適な住環境を作ることができ、本当に良かったです。

【この1年間で私が出会った、最も印象に残る（影響を受けた）人物】

「人生を変える出会い」—専修学校3年/宮城県出身・在住

私はこの1年間でとても素敵な先生に出会いました。この1年、私たちのクラスの担任となり、いつも生徒一人ひとりのことを考えてくれていました。実習や行事でつまづいたとき、なかなか上手くいかない人間関係など、悩んでいると必ず声をかけてくれました。私は現在保育士を目指しています。先生は1年間を通して、信頼関係の築き方を教えてくれました。しかし、先生はご自身の都合で辞めることになりました。とても寂しいです。仕方がないことと受け入れましたが、今でも信じられません。人生のほんの少しの時間にこうして、私のように人生を変える人に出会える人はどのくらいいるのだろうかと考えたら、私はとても素敵な経験ができたと感じました。私が感じた、憧れる気持ちを子どもたちにも感じてほしいです。私は先生のように、子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、共に成長していく保育士になります。そして私のように子どもたちの印象に残る先生との出会いを感じてほしいです。先生のくれた言葉、行動、思い出を大切にしていきたいです。



※学年は2016年3月時点のものです。

基金運営活動収支報告

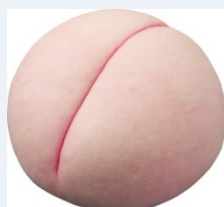
「夢を応援基金」活動収支計算書（2015年4月～2016年3月）

（単位：円）

昨年度からの繰越金		351,726,369
寄付金等収入		189,459,158
ローソン拠出金	30,000,000	
ローソン店頭募金	143,893,724	
ローソン寄付つき商品等 *	1,175,566	
ポイント募金（Pontaポイント・dポイント）	829,490	
Lopp募金	563,000	
ローソンお取引先	11,278	
ローソングループ社内募金	12,986,100	
その他収入		68,827
受取利息	68,827	
収入合計		189,527,985
奨学金支出		173,520,000
奨学金（483名）	173,520,000	
基金運営支出		10,041,634
基金運営管理費用	10,030,402	
奨学金等振込手数料	11,232	
支出合計		183,561,634
次期繰越金		357,692,720

* ローソン寄付つき商品等：ローソンオリジナル商品の売上金の一部等を寄付しています。

～寄付つき商品について～



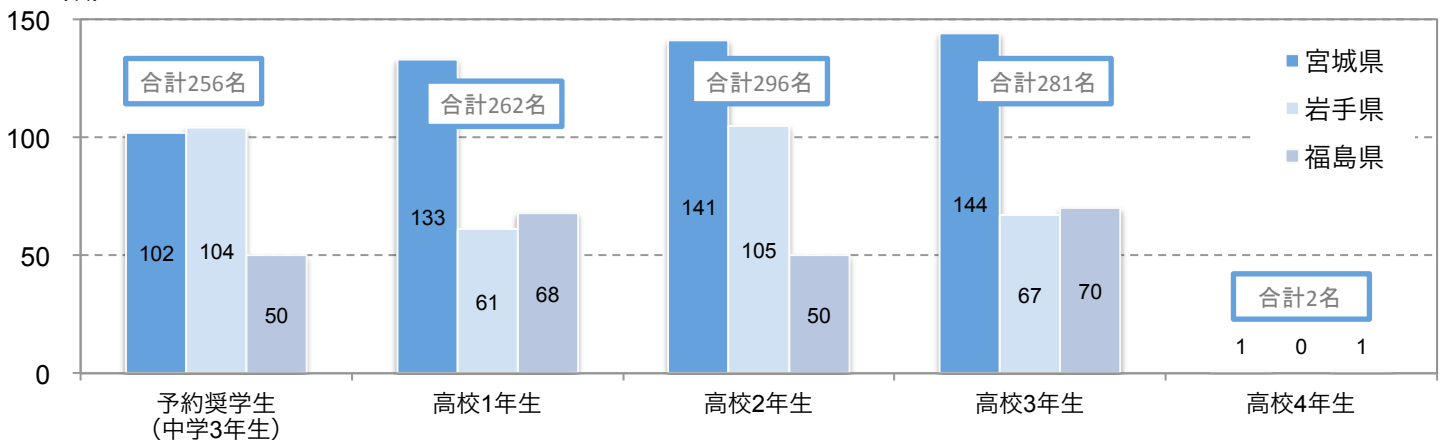
ローソンはお取引先様と連携し、売上金の一部を「夢を応援基金」に寄付する、寄付つき商品を随時販売しています。

写真上は2016年3月に東北エリア限定で販売された「まるで桃パン」（左）と「東北産フルーツサンド」（右）です。

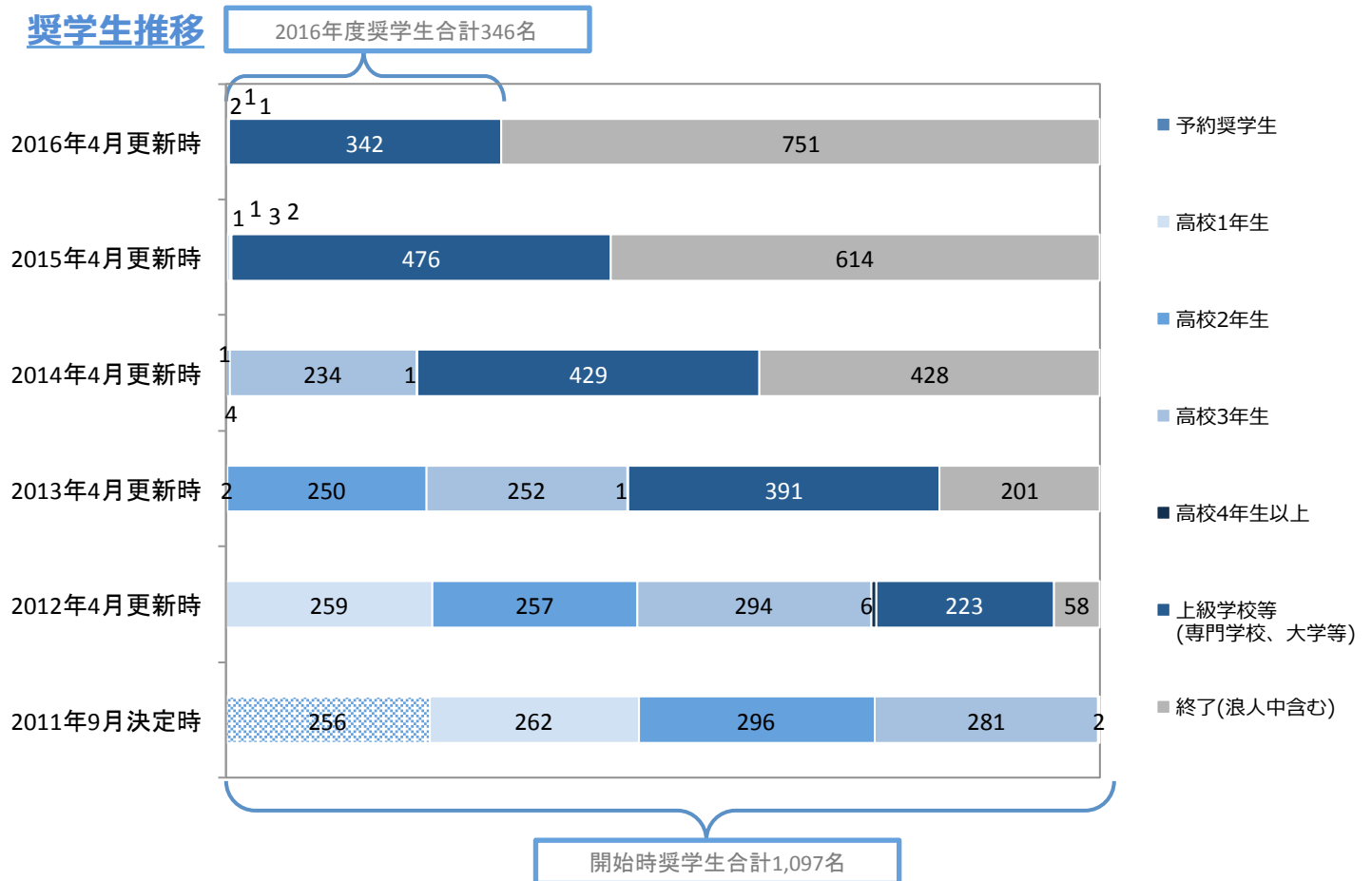
写真下は宮城県気仙沼西高等学校の生徒さんが地元の地産食材を使用することで地域の活性化を応援したいと考案した「気仙沼西高発！Come Come弁当」。2016年2月に宮城県内で限定販売されました。

奨学生等の状況

奨学生決定数内訳 (合計1,097名。2011年9月末現在)



奨学生推移



*各生徒数は、2012年4月の更新手続きにおいて、募集時の情報の訂正等があり、以前に公表されたものと数値が異なる場合があります。

上級学校等奨学生数内訳 (2016年4月更新時)

